第２　教育研究団体の意見・評価

○　全国歴史教育研究協議会

（代表者　髙野　修一　　会員数　約16,200人）
ＴＥＬ　042-582-2511

１　前文

平成 30 年３月告示の学習指導要領が令和４年４月に入学した生徒から年次進行で適用され，今年度入試は全面施行から２年目であり，共通テストでの歴史総合の試験は２回目の施行を迎えた。

歴史総合は「近現代の歴史の変化に関わる諸事象」を，「歴史的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる」ための「資質・能力を」育成するものである。その学習内容は，歴史的な見方・考え方を学び，問いを中心に構成する学習の重視，歴史の大きな変化に着目して世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉える学習を行う点が特徴である。また学習内容を示す項目は，知識を身に付ける項目とそれに対応して思考力・判断力・表現力等を身に付ける項目からなり，両者を貫く主題を設定して学ぶことで一体的な理解に至るという構造である。以上の歴史総合の目標や内容，科目の構造に照らし合わせて検討していく。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

今年度の平均点は 24.98 点で，前年度(24.83 点)と大きな変化はなかったが，日本史探究と組み合わさる第１問の平均点は 16.82 点で前年度（14.72 点）より約 2.1 点上昇した一方，世界史探究と組み合わさる第２問の平均点は 16.43 点で前年度（18.15 点）より約 1.8 点減少した。結果として，大問間における平均点のずれも解消されたといえる。出題の形式や場面設定なども授業や学校での学習活動を踏まえた作りになっているとともに，会話文やノートの記述など幅広い情報が掲載されており，歴史総合の趣旨に沿った出題が昨年以上に多かった。

設問数は大問２題，小問 16 題の構成であった。出題範囲は歴史総合の「近代化と私たち」から「グローバル化と私たち」まで幅広く出題されていたが，一部，歴史総合の学習範囲外であり，中学校での学習状況を踏まえた出題と思われるものも含まれた。出題形式でみると，正誤問題が５題，正誤の組合せ・語句の組合せ・正文組合せがそれぞれ３題，用語と事項の説明の組合せが２題と，バランスよく出題された。昨年度出題された年代配列がなくなった代わりに時期の判別を伴う問題が増えた。時代別では，重複も含めて個別の区分で見ると，「結び付く世界と日本の開国」が３題，「国民国家と明治維新」が９題，「第一次世界大戦と大衆化」が３題，「経済危機と第二次世界大戦」が２題，「冷戦と世界経済」が５題，「世界秩序の変容と日本」が６題となり，昨年度に比べて「グローバル化と私たち」からの出題が合計で６問増えた。このうち時代区分横断の問題は９問で，その中心は歴史事象や人物の時期区分を考えさせる出題であった。分野別ではほとんどの問題が複数の分野にまたがるとともに，日本史的事項と世界史的事項の融合も見られた。分野別に見ると，重複しているものも含めて，日本史的事項に関わる政治が３題，社会経済が５題，軍事外交５題，文化が１題，世界史的事項に関わる政治が５題，社会経済４題，軍事外交９題で，文化からの出題はなかった。地域別に見ると，アジアに関する出題が地域をまたぐ出題を含めて７問（そのうち，日本に関する出題は地域をまたぐ出題を含めて５問），ヨーロッパに関する出題は地域をまたぐ出題を含めて３問，アフリカ及び南北アメリカ，オセアニアに関する出題はなく，複数の地域をまたぐ

問題は５問あった。以下，「歴史総合」の試験の各問について検討した内容を述べる。

第１問は，災害の歴史に関する生徒の活動を題材にした出題で，二つのパートで構成された。

Ａは災害の要因や開発との関係について考察を行うという場面設定である。

問１は主に大西洋三角貿易に関する正文選択問題である。かなり離れた単元に登場する「アフリカ分割」が正文を選ぶ上でのキーワードになっている。パネル内の情報を整理する必要があり，歴史総合の授業内での資料活用や，思考力・判断力が生かされやすい問題であった。「コロンブス」は歴史総合が想定している時期から外れている。世界史探究を学習した生徒ならば容易に正答できるが，歴史総合のみの学習者や，日本史探究の学習者は若干戸惑った可能性がある。

問２は正しい語句の組合せ問題。空欄アの地域選択は基礎的な知識を問うものであり，空欄イも表に示された時期や研究対象の地域から考察すれば選択できる。19世紀末から20世紀初頭にかけて帝国主義の時代であること，下関条約で日本が台湾を清から獲得したことがわかれば容易に正答できる。しかし，誤文であった「第三世界の台頭」は，教科書によって記述が異なり，「第三勢力」とだけ記すものや，「第三世界のなかに第三勢力が存在する」と記すものもある。特定の教科書に合わせるのではなく，必要に応じて併記するなどの配慮があってもよかったであろう。

問３の（１）（２）はパネル２「インドの飢饉」パネル３「エチオピアの飢饉」に関する出題で，（１）は正誤の組合せ問題，（２）は正文選択問題である。（１）はガンディーの非暴力・不服従運動が２回とも戦間期の出来事であったこと，イタリアによるエチオピア侵攻がいずれも第二次世界大戦以前であったことやイタリアがエチオピアの隣国ではないことを理解していれば，正答を得ることができる。（２）は（１）の内容を踏まえて資料を読み取る問題である。パネル２枚の情報を読み取らせるのであれば，飢饉が起きる原因についての考察や類似の歴史上の現象や現代の事象などと比較させる（２）のような出題のほか，資料から考えうる「問い」やそれを補強するための資料を選択させる出題も考えられよう。

問４はチョルノービリ（チェルノブイリ）原子力発電所事故に関する語句の組合せ問題である。事故発生の1986年がソ連の時代であったことと，冷戦当時のヨーロッパの情勢を地理的に把握して問題中の地図と照応することが求められた。しかし，同事故とソ連解体との前後関係をレポート中の「1986年」という年代から読み取らせることは，安易な年代暗記の助長が危惧される。地図中に国名を併記して読み取らせたり，ウクライナの主権回復などの情報をレポート内で提示したうえで「独立国家共同体」か「ソ連」か，を考えさせたりする問題もあり得ただろう。

Ｂは災害への対応や，災害後の社会について考察を行うという場面設定である。

問５は正文選択問題で，資料の読み取りと知識との両方が求められた。産業革命で石炭に燃料が変わったこと，気候変動に対する国際的な関心の高まりは現代の事象であること，生糸は特に輸出に回されたこと，などはいずれも基本的な知識である。選択肢四つを，読み取り・知識それぞれ二つずつではなく，どの選択肢も読み取りと知識が両方必要な組合せで，史資料の読み取りに終始しない工夫を求めたい。

問６は支援金の内訳の読み取りと，知識の組合せを用いた正文組合せ問題であった。関東大震災，排日移民法，五・四運動のそれぞれの時期を正しく把握していれば，図表の読み取りで正答を導くことができる。ただし，グラフの内訳を読み取らせるのであれば，その背景や関係性などを思考させる，もしくは促すような「問い」を設定することもできたであろう。また，関東大震災の復興支援の金額と内訳に関するグラフで多額の資金で復興支援を提供しているのが「アメリカ合衆国」である一方で，排日的な動きがあったことをその時期の出来事として選ばせる必要があったのだろうか。排日的な動きと，関東大震災への多額の支援に因果関係や社会的背景が内在するのであれば，示唆的な出題であるが，単に1920年代の出来事を問うならば，「ワシントン会議」や「パリ不戦条

約」などでも時期の判別をさせるには十分だったであろう。

問７は正しい語句と正文の組合せ問題。「歴史の扉」の資料活用に関連する出題であった。東日本大震災までが出題されたことで，改めて「現代の私たち」とのつながりを意識する科目であることが示された。表２からの読み取りは「いずれも」という表現が正答を読み取る根拠になっていた。各史料ネットの具体的な活動内容のレポートや史料ネットの現状などから，史料保全の在り方などに考察が及ぶ設問であると，より良かったであろう。

第２問は「近現代における都市の変容」という主題に基づいた班別学習という設定での出題であった。二つのパートから構成された。

Ａは，フランス第二帝政下で行われたパリの都市改造についての近代化に関する出題。

問１は，三点の資料の内容から読み取ったことと歴史的知識をふまえて解答する正文選択問題で，比較的取り組みやすかった。資料を読み取り，「フランス皇帝による積極外交」から「ナポレオン３世」を，「19 世紀半ば以降」から「工業化」を考え導き出せるが，誤文である選択肢に「高度情報化社会」とあり，正答を選びやすかった。

問２は，19 世紀半ばのフランス第二帝政下における出来事について正誤を判断する問題。文あ幕末の四国艦隊下関砲撃事件（下関戦争），文いは，第一次世界大戦中のサイクス＝ピコ協定の説明となっており，同時代の出来事を地域横断的に正しく理解しているかを問う問題である。いずれも日本史探究・世界史探究の学習内容としては必須ではあるが，歴史総合の学習内容としてはやや細かい知識であろう。それぞれの事件の発生した時期ではなく，その時期に発生した理由や出来事の背景となる歴史的事象などを問うことも考えられる。

問３は江戸・東京における都市構造の変化に関する誤文選択問題。①の「南海路や東廻り航路」は歴史総合の教科書本文中には記載がない。歴史総合のみ，または世界史探究を学習した受験者にとっては，正誤の判別は困難であろう。④の「文化住宅」は昨年度の「モダンガール」から２年連続で大項目「国際秩序の変化と大衆化」の日本における文化的側面からの出題である。しかし，日本史探究で扱う大正期・昭和前期の「文化住宅」という文化史知識を知っているか否かを問う問題になっているため，中学校での既習事項とはいえ歴史総合の学習実態と適合するか疑問がある。アメリカの戦間期の経済的な発展など世界の潮流と関連付けるなど，歴史用語一つに頼らずに正答に行きつく思考を促すような工夫が求められよう。

問４は 1970 年代以降の経済について，グラフの読み取りとその背景を組み合わせる問題。「列島改造」は歴史総合の教科書では扱われていない用語である。

Ｂは，植民地化されたアジアの都市をテーマにした会話文にもとづいた「大衆化」または「グローバル化」に関する出題。

問５は植民地時代の東南アジア諸地域に関する基本的な知識を問う正文選択問題。正文である③は，ビルマに対するイギリスの支配体制を記載していない歴史総合の教科書もあるため，その教科書で学習した受験者は解答するのが困難だった恐れがある。第２問では地図が扱われていないので，東南アジアの地図上での位置とその内容の組合せにするなど，資料を活用するなどの工夫ができたであろう。また，貿易額の変遷や内容・量の変化を読み取らせることで，その地域の植民地支配の特徴を考えさせることもできる。単なる「植民地支配とは」という知識の確認にとどまらず，当たり前に存在する地域的な差異や関係性の変化に焦点化する出題を期待したい。

問６は 1930 年代半ばの朝鮮・京城中心部についてまとめたパネル２の読み取りと時代観を問う問題。資料は地図だけでなく説明文も読み取る必要があり，工夫されていた。パネルが示す時期が「三・一独立運動後」であるかどうかは，そこに書かれた「1930 年代」「1936 年」から第一次世界大戦後であることを読み取って考えることになる。年代以外を根拠に時期を判別する手立てがある

とパネルの情報をより生かした出題になったであろう。

問７は，第二次世界大戦後の香港の経済発展がテーマ。1950 年代に着目したノート２の空欄を歴史的知識と読解力を生かして補充する問題で，基礎的な知識が問われた。しかし，空欄イの前に「戦前からの」という一言がないので，文頭の「戦後香港」に影響され，正文である「周辺からの労働力の流入」を誤文と認識する恐れがある。香港が他の地域と異なり軽工業中心に発展した背景を敷地面積の違いや主要産業の違いなどから考えさせて「重工業ではない」ことを選択させるなど工夫ができたのではないだろうか。

問８は 1880 年代のサイゴン，1930 年代の京城，1950 年代の香港の住民構成のグラフを読み取ったメモの正誤判定問題。Ａ・Ｂで扱われているノートやパネルの内容をふまえて解答する。植民地都市の住民構成の違いを読み取らせるようになっていて，問１の社会階層分布の読み取りと類似した問題である。グラフの読み取りに，その歴史的背景や異なる資料の情報からの読み取りを加えて思考を促すなどの工夫がほしいところである。

３　総評・まとめ

現行の学習指導要領に基づく共通テストも２年目を迎えたとはいえ，新科目の歴史総合としては未だに現場の授業レベルでは手探りの状態が続いている。昨年度の共通テストでは，試行問題と実際の出題との乖離や，出題内容における日本史・世界史の偏りもあり，平均点のばらつきもやや大きかった。今年度の出題を見ると，問題の多くは過度に細かな知識を求めず，多種多様な資料から情報を読み取らせて正答を導かせようとする姿勢が特徴的であり，受験者にとっても取り組みやすいと考えられる問題が多かった。大問間での平均点の大きな不均衡もなくなっている。来年度以降も，今年度と同様，工夫された作問を期待したい。